〔一〕次の文章を読んで、後の問に答えよ。

１９９０年代以降、日本社会が多民族・多文化的であることが急速に「目に見える」ものになってきた（「可視化」）。それとともに、日本人と異なる言語や文化をもつニューカマー外国人住民とどのように「多文化共生」するかという課題がクローズアップされるようになった。ただし、「共生」あるいは「共に（ともに）生きる」という言葉自体はそれ以前からあり、民族的マイノリティをめぐる文脈では、アイヌ民族や在日コリアンといった当事者やそうした人々を支援する日本人によって用いられてきた。それがニューカマー外国人住民支援の必要性や日本人住民の異文化への寛容さを呼びかけるために、行政や市民団体に使用される「多文化共生」というスローガンとして定着したのは１９９０年代半ば以降である。大都市部や工業地域等に外国人住民が集住し、その社会的影響が顕在化する地域が現れた。そうした状況に対処するため、地方自治体は医療・保健、雇用環境、社会保障・福祉、情報流通、言語、子どもの教育といった外国人住民の生活課題に対処する行政サービスを展開するようになった。

「多文化共生」という言葉が外国人住民支援のスローガンとして普及した大きなきっかけは、１９９５年に起きた阪神・淡路大震災であった。外国人被災者への支援をきっかけに、ニューカマー外国人住民支援施策の重要性が市民活動のなかで提起されたのである。こうした動きは、外国人住民を多く抱える他の地方自治体でも起こった。２００１年には外国人集住都市会議が発足し、政府に対して全国的な外国人住民支援施策の実施を求めた。やがて政府も、「多文化共生」に関連する施策を打ち出すようになった。いっぽう財界団体も、高度な技術・知識を身につけた「高度人材」外国人労働者を企業・経済の利益に活用する姿勢を表明した。

こうして今日の日本社会では、「多文化共生」という謳い文句が定着しつつある。これは歓迎すべき変化だが、問題がないわけではない。それは、このスローガンの意味するものが日本語が不自由なニューカマー外国人住民への支援や、異なる文化をもった人々への寛容の奨励に限定されがちなことである。そうなれば、多文化共生とは彼・彼女たちが急増した１９９０年代以降に生じた新しい社会的課題であると見なされるようになる。こうして「日本はかつて単一民族社会であったが、それがニューカマー外国人住民の増大によって多文化化してきた。それゆえ日本は多文化共生社会を目指さなければならない」という、「単一民族社会から多文化共生社会へ」という物語が受け入れられていく。

だが、この物語は事実とはいえない。先述のように、民族的マイノリティと「ともに生きる」重要性は以前から問題提起されてきた。また小熊英二がロンパ[ウ]したように、そもそも日本が「単一民族社会」であるという通念[エ]自体が、実は第二次世界大戦以降に定着した「神話」である。第二次世界大戦以前、台湾や朝鮮半島などを植民地化した日本は公式に「多民族帝国」を名乗っていた。また日本の北部に先住民族として独自の文化・社会を築き、「和人」（日本人）の侵略を受けながらもそれを受け継いできたアイヌ民族や、１７世紀はじめに薩摩藩の侵攻を被りつつ１９世紀後半までは独自の王朝として存続し、「ヤマトンチュ」（「本土」の人々）とは異なる独自の文化を維持してきた琉球王国の存在は、現在「日本社会」とされる領域が明治以前には多民族による複数の社会であったことを示している。それに加えて在日コリアンの存在は、「単一民族神話」が強い影響力をもった第二次世界大戦後ですら、日本が単一民族社会などではなかったことを物語っている。「単一民族社会から多文化共生社会へ」という物語はこうした事実と異なっている。それどころか、多文化共生の名の下にニューカマー外国人住民への支援だけが語られることで、在日コリアンやアイヌ民族、琉球・沖縄の人々などが経てきた苦難の歴史が忘却されてしまいかねない。その意味で、この物語はそれが否定しているはずの「単一民族神話」[オ]と共謀する側面をもちうる。

そうはいっても日本では依然として、「単一民族神話」が一定の影響力を保っている。多くの「多文化共生」論者はそれに反対して、この「日本独特」の社会観を打破し、日本が多文化社会であることを認め、米国やオーストラリアといった多民族国家のように「多様性の中の統一」を目指そうという。いっぽう、元来同質的で閉鎖的な日本社会が多民族社会を目指すのには無理があると考える人も少なくない。両者は一見すると対立する主張だが、同質性を重視するのが日本の「特殊性」であるという思い込み自体は共有されている。

だが「同質性」を重視する「単一民族神話」も、「共通性」を重視する多様性の中の統一としての「多文化共生」も、ある国家のネイション（民族／国民）の拠り所をどこに求めるかの違いに過ぎず、両者はともにナショナリズムの一種である。吉野耕作はナショナリズムを「『我々』は他者とは異なる独自な歴史的、文化的特徴を持つ独自の共同体であるという集合的な信仰、さらにはそうした独自感と信仰を自治的な国家の枠組みの中で実現、推進する意志、感情、活動の総称である」と定義した。ネイションの起源については、それはナショナリストたちが想像するように太古からレンメン[カ]と続いてきたものではなく、近代の社会変動やナショナリズム運動を通じて形成されてきたと考えるエルネスト・ゲルナーやベネディクト・アンダーソンらの「近代主義」と、大筋では近代主義に同意し

つつ、現代のネイションを構成する文化要素の一部を前近代に求めるアンソニー・スミスらの立場がある。しかしスミスにしても、ネイションが現在の姿のまま太古から存続してきたと主張しているわけではない。ナショナリズムが力をもつのは、ネイションが太古から実在し、自分にとってそれが不可欠なものであると人々に信じさせることができるからなのだ。

アンダーソンによれば、あらゆる近代ネイションは「想像の共同体」である。自分を「日本人」だと考えている人は、自分と同じ「日本人」だと思っている人々の大部分と会ったことはないし、一生会うこともない。実際には、そうした人々と自分の習慣や価値観、話し言葉は異なっているかもしれない。それでも、われわれは同じ共同体に属する「同胞」なのだという想像によって人々は互いに結びつく。しかし自分たちが他と異なるネイションの一員であると想像するためには、自分たちと他者を区別する何かがなければならない。米国のような白人植民地国家では、かつての宗主国とのあいだに民族・文化的な区別を見いだすことが難しかったために、自由や平等といった市民的価値観を共有することをネイションの拠り所となす「シビック・ナショナリズム」の論理が前面に押し出されることになった。それはやがて、「われわれは民族・文化的には多様であっても市民的価値観という『共通性』をもつ、ひとつのネイションである」という「多様性のなかの統一」型のナショナリズムへと展開していった。いっぽう、やや遅れて近代国家形成を果たしたドイツや東欧、ロシアや日本などでは、ナショナリズムの拠り所として言語や文化を重視する「エスニック・ナショナリズム」が発展し、同じ言語や文化、祖先を有している人間がネイションであるという「同質性」が強調された。日本の「単一民族神話」も、エスニック・ナショナリズムの現代的表現のひとつである。

しかしスミスも指摘しているように、シビック・ナショナリズムとエスニック・ナショナリズムは厳密に区別できるものではない。近代国家は産業を発展させて社会的分業を複雑化させるために、共通の言語や文化をもたなければならなかった。またそもそも自由や平等といった価値を信じるという主観的基準だけでは、自国民と外国人を区別するのが困難になってしまう。それゆえ米国のような国家でさえ、実際には国民のなかのマジョリティの人々の文化や言語を優先し（「アングロ・コンフォーミティ」）、マイノリティの人々をそれらに同化させようとしてきた。いっぽう、近代以降エスニック・ナショナリズムが根強かった日本やドイツのような国家でも、今日では自由や平等といった市民的価値は大きな力をもっている。それゆえ同じ国内に住む人々を民族が違うからといって差別することには、大きな道義的非難がつきまとう。さらに、移民・難民・外国人住民の増大によって国内の文化的多様性が高まるにつれて、

政府は同質性だけではなく共通性の論理を部分的に採用して国民統合を維持しようとする。その結果「多様性の中の統一」という統合理念が影響力を増すことになる。日本の「多文化共生」も、多民族・多文化社会化へのこうした対応のなかから生じた「多様性の中の統一」型ナショナリズムといえる。

ネイションが「想像の共同体」であるということは、それが実在しないということではない。だが、想像でしかないはずの同胞のつながりを人々に信じさせる何らかの社会的メカニズムがない限り、ネイションは成立しないし維持もされない。公教育は、ネイションの再生産のためのもっとも重要な制度のひとつである。その他にも、たとえばアンダーソンは「地図」や「博物館」の役割も重視する。地図はネイションに分かれ国境線によって区分けされた世界というイメージを、博物館は「国民の歴史」というイメージを定着させた。こうした制度やシンボル・言説は人々を「同胞」として「再想像」させる。吉野はこうした現代国民国家のナショナリズムを「再構築型ナショナリズム」と呼んだ。国境を越えた人の移住の増加によって多民族・多文化化が進行している現代先進諸国では、多様化していく住民をネイションとして「再想像」するために言語・文化的同質性だけに依拠すること（＝「同化主義」）がますます困難になっている。しかし、多様性の中の統一を目指す「多文化共生」もまたナショナリズムである以上、人々を同質化させようとする社会的メカニズムから完全に自由にはなれない。こうして多くの先進諸国では、「多様性の中の統一」に内包される同質化志向と差異の尊重との「バランス」のとり方が政策や世論における重要な論点となる。

ところで「単一民族神話」が一般市民にシントウした戦後の日本は、「一億総中流」という社会通念が拡大、定着した時期でもあった。バブル崩壊の頃までの日本社会では、「日本は貧富の差がない平等社会である」という信念は根強かった。しかし、これも「単一民族神話」と同じように幻想に過ぎなかった。社会主義諸国を含め、階級・階層のない近代国家などどこにも存在したことはない。日本でも、社会学者たちは社会階層の変化についての実証的な調査を戦後一貫して続けてきた。

論理的に考えると、総中流幻想が成立するためには単一民族神話が必要であったし、その逆もまた真であったという仮説を立ててみることができるだろう。なぜならアイヌ民族、在日コリアン、琉球・沖縄の人々といった民族的マイノリティは、戦後日本において厳しい差別や排除によって、まさに「貧困や格差」に直面していたからである。それゆえ日本が総中流社会であると人々が信じるためには、貧困に喘ぐこうした人々の存在が単一民族神話によって隠されなければならなかった。さらに総中流幻想が普及していくにつれ、

社会的下層としての民族的マイノリティの存在がいっそう忘却され、単一民族神話も強化されていったのではないだろうか。差別／排除と貧困／格差というふたつの社会問題は、同時に忘却されなければならなかった。つまり「単一民族神話」が隠ぺいしていたのは、文化的・民族的な違いが階層的不平等と結びついて生じた「マイノリティ―マジョリティ」という社会構造の存在だったのだ。

もちろん、アイヌ民族や被差別部落といった民族的・社会的マイノリティの困難に対する行政の支援政策は、不十分ながら存在した。しかし「日本は平等で皆が豊かな社会であり、貧しいのは本人の責任である」という幻想が、マイノリティの貧困の背後にある民族差別や階層的不平等といった問題をオオ(サ)い隠した結果、そうした人々への支援は民族の問題でもなければ階層の問題でもない「貧乏人に対するお恵み」としてとらえられることになる。こうして、マイノリティへの支援は少数の人々にだけ許された「利権」（あるいはより最近の言い方では「特権」）とされ、「なぜかれらだけが特別扱いを受けるのか」という「逆差別」の論理(シ)が正当化される。

単一民族神話や総中流幻想といった社会通念は、私たちが自分の社会を見る際にかけていた色眼鏡(ス)のようなものだった。そして日本における民族的・社会的マイノリティは、現在では改善がみられるものの、社会のなかで依然として不利な立場に置かれる傾向があることに変わりはない。多文化主義や多文化共生を唱えることが、そのような現実から私たちの目をそらす結果になってはならない。

（塩原良和『共に生きる――多民族・多文化社会における対話』より）

問一　「寛容」(ア)の対義語として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 1

1 狭小　2 狭量　3 謹戒　4 謹慎　5 謙虚　6 謙譲

問二　「呼びかける」(イ)とあるが、これと同じ意味で「かける」を用いているものを、次の中から一つ選べ。 2

1 旧友を見かける　2 本を読みかける　3 壁が崩れかける
4 展覧会に出かける　5 答えを言いかける　6 意見を投げかける

問三 「通念」(エ)の言い換えとして、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 [3]

1 主眼　2 共感　3 状況　4 常識　5 理想　6 願望

問四 「バランス」(ケ)の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 [4]

1 均衡　2 重点　3 秩序　4 配分　5 割合　6 緊張

問五 「色眼鏡」(ス)の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 [5]

1 自明の公式　2 希望的観測　3 美化された幻想
4 意図的な改ざん　5 偏ったものの見方　6 憶測による楽観性

問六 「ロンパ」(ウ)「レンメン」(カ)「シントウ」(コ)「オオい」(サ)の漢字と、同じ漢字を含むものを、次の中から一つ選べ。 [6] ～ [9]

ウ 1 アッパれ　2 リンパの絵画　3 ハッパを掛ける
4 熱がデンパする　5 ネッパに見舞われる　6 ジュッパひとからげ

カ 1 ヒメンされる　2 メンカイ時間　3 モメンの生地
4 ショウメン玄関　5 ノウメンを被る　6 メンエキ力を保つ

コ 1 作業のシンテン　2 領海のシンパン　3 シンサンをなめる
4 河川のシンショク　5 自らのホシンに走る　6 シンショクを忘れて打ち込む

サ 1 一陽ライフク　2 フクエキの義務　3 シフクを肥やす
4 フクスイ盆にかえらず　5 シフクして時の至るを待つ　6 カフクはあざなえる縄の如し

問七

「この物語はそれが否定しているはずの「単一民族神話」[オ]と共謀する側面をもちうる」とあるが、このことの説明として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 10

1 「単一民族神話」も「多文化共生」も、ともに同質性を重視するナショナリズムの一種であるということ。
2 異なる文化をもった人々と「ともに生きる」重要性は、政府や財界主導の政策によって支えられているということ。
3 「単一民族神話」に多くの「多文化共生」論者が反対することで、かえって日本社会が多民族社会を目指すのは無理だと思わせること。
4 日本が「単一民族国家」であるという見方を放棄し、かつての「多民族帝国」をもとに、現代において多文化共生社会を実現すること。
5 日本には以前からアイヌ民族や琉球・沖縄の人々、在日コリアンなどが住んでおり、日本は以前から多文化共生社会であったということ。
6 外国人住民の急増のみに目を向けて多文化共生をうたうことは、以前から日本にいる民族的マイノリティがこれまで受けてきた差別や排除を忘れさせるということ。

問八

「想像の共同体」[キ]とあるが、それを可能にする社会的メカニズムとして、筆者の考えと**異なるもの**を、次の中から一つ選べ。 11

1 公教育　2 地図や博物館　3 ナショナリズム運動
4 言語や文化の同質化　5 国境を越えた人の移住　6 自由や平等などの価値観

問九

「シビック・ナショナリズムとエスニック・ナショナリズム[ク]は厳密に区別できるものではない」とあるが、その理由として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 12

1 シビック・ナショナリズムもエスニック・ナショナリズムも民族的・社会的マイノリティを不利な立場に置くから。
2 シビック・ナショナリズムもエスニック・ナショナリズムもネイションが太古から実在し、人々にそれが不可欠なものであると信じさせる力を持っているから。
3 シビック・ナショナリズムもエスニック・ナショナリズムも、ナショナリズムが市民的価値観を共有するものである限り、「想像の共同体」であるネイションの維持を前提としているから。
4 シビック・ナショナリズムの前提となるネイションも、エスニック・ナショナリズムの前提となるネイションも、民族的・文化的に多様な人々が住んでいるという意味では共通しているから。
5 国境線で区分けされた世界のイメージを定着させる地図と、国民の歴史をイメージさせる博物館の存在が、シビック・ナショナリズムとエスニック・ナショナリズムを維持するために必要だから。
6 近代国家はシビック・ナショナリズムであれエスニック・ナショナリズムであれ、マジョリティの人々の文化や言語を優先する動きと市民的価値観を共有する動きの両方によって、国民統合と社会的発展をはかってきたから。

問十 「「逆差別」（シ）の論理」とあるが、それはどのようなものか。最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 13

1 マジョリティが意識せずに享受してきた豊かさを利権とみなす見方
2 マジョリティが直面する貧困や格差に目を向けるべきだという見方
3 マイノリティが貧しいのはマイノリティ自身の責任であるという見方
4 貧困や格差に苦しむマイノリティへの行政的支援を特権とみなす見方
5 マジョリティはマイノリティへの差別・排除によって豊かになったとする見方
6 貧富の格差は「マイノリティ―マジョリティ」という社会構造と結びついているという見方

問十一　本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。[14]（[14]の欄に、二ヵ所マークすること）

1　単一民族神話は、民族的マイノリティの苦難の歴史を忘却させてしまうものである。

2　単一民族神話は、日本人が同質性を持つ民族であると古来語り継いできたものである。

3　単一民族神話は、多文化共生という新しい物語に書き換えられることで、想像の共同体をより強くするものである。

4　ナショナリズムは、多様性よりも同質性に重きを置く文化の総体である。

5　ナショナリズムは、近代以降、世界的に多くの国民国家を形成する推進力となった。

6　ナショナリズムは、太古より一貫して存在する信仰や文化を裏づける思想であった。

〔二〕次の文章を読んで、後の問に答えよ。

雨が降ればぬかるみ、風が吹けば目を開けていられないほど埃（ほこり）が舞う田舎道より、舗装されたアスファルト道路が、本当はみんな好きなのではないだろうか。

どんな過疎の村にも宅配ができる立派な道路を造ろうという「文明」観を頭から否定できる者もそう多くはないだろう。アスファルトの都会を嫌う者と、ぬかるみの田舎を嫌う者とどちらが多いかは、今日の過疎化現象を見れば明らかなはずで、それでもなお手放しで「自然との共生」を唱えることには、正直いって欺瞞（ぎまん）の感を禁じえない。あるいは「共生」は言葉のあやで、「自然」そのものが重要だというのだろうか。ならば、過疎化が加速し、さらに住民が消えうせ、天然の原生林に戻れば最高ということになる。まさか、道路族議員とて、有権者のいない場所まで道路を造ろうとはいわないだろう。

私たちが愛（いつく）しむべき「自然」とはいったい何なのだろうか。

文化庁の国際文化交流懇談会に委員として出席した際、私は「里山文化」という言葉を初めて聞いた。日本文化を世界に発信する際に「自然との共生」という側面から強調すべく、世界に誇れる伝統文化として農山村の生活を見直すべきだという意見である。最終的な報告書「今後の国際文化交流の推進について」では、次のような文脈で提言されている。

「国際文化交流では、遠来の客をありのままの日本、その日常生活へ招き入れる工夫が大切であろう。それには、我々一人一人が日常の生活文化に新たな価値を再発見することが必要である。また、外国からの訪問者を地域に残る伝統文化へと誘（いざな）う工夫も望ましい。里山文化の振興など、既にいくつかの試みが成果を挙げているが、それには、我々一人一人が日本文化に好奇心を抱いていなければ、それを外国人に伝えることなどできないことは言うまでもない。」（傍点引用者）

私自身も原案執筆にたずさわったわけで、一応もっともな内容である。［　A　］もしそうならば、なにゆえに豊かな自然に溢（あふ）れた農山村から人々は流出し続けるのか。

都会生活を享受している文化人が高層ビルの会議室に集まって里山文化の重要性を語り合っている間、私がある種の居心地の悪さを感じていたことをここに懺悔（ざんげ）しよう。というのも、かつて私は『現代メディア史』（一九九八年）のはしがきにこう書いたからであ

る。

「アルヴィン・トフラー『第三の波』が刊行された一九八〇年に大学に入り、ベルリンの壁崩壊の一九八九年に博士課程を終えた私が西洋史を専攻していた学部生時代、「 B 時代の感性は想像できない」と呟いて中世史専攻の先輩にたしなめられたことがあった。異国の古代史の面白さが、理解できなかったわけでは決してない。その呟きは、むしろリュシアン・フェーブル『フランス・ルネサンスの文明』（一九二五年）読後の余韻によるものであった。

「現代のわれわれが、程度の差は別として、全員、望もうが望むまいが温室の産物だということを、肝に銘じて忘れまい。十六世紀の人間は、吹きっさらしにされていたのだ。」

それ以後、温室育ちの我々が吹きっさらしの人間とどれほど異なった人間なのか、我々の「伝統」が如何に新しいか、を私は強く意識するようになった。」

一六歳になるまでに二人に一人以上が死亡した時代、「神経の敏感でなかった」一六世紀について、フェーブルの言葉をさらにもう少し引用してみたい。

「フランス十六世紀の具体的な人間、生きている人間、骨と肉とをもった人間と、われわれ二十世紀のフランス人とは、ほとんど似たところがない。あの野人、あの放浪者、あの村人。彼は何とわれわれから遠いことか！（中略）まったく、現代のわれわれが強く執着し縛られている、家庭とかわが家とか妻とか子供とか、こうしたものは何もかも、十六世紀の人間から見れば一時的な財産でしかなく、何時でも放り出す心構えができているように思われる。」

この二宮敬氏の名訳は、私が学生に勧め続ける教養書の一つである。第二章「知の追求」では活字印刷の役割について記述があり、私の専門領域であるメディア史とも無関係ではない。 C 、この本は私にとって「メディア史」ではない。 D 、この活字印刷論から私が学びとったのは、私のメディア史研究はグーテンベルクを出発点にすべきではないという決断だった。 E 、「吹きっさらしの人間」の「古代への情熱」に規定されていた初期印刷技術は、「未来への情熱」に駆られた現代人のメディア観とはまったく別のコスモスに存在するということである。 F 「ラスコーの洞窟」や「メソポタミアの楔形文字」から出発するような旧来のメディア史など、まったくもって問題外である。私のメディア史とは「現代」メディア史であり、電信と電灯を前提としたメディア社会の

文化史にほかならない。

こうした文明観を身につけた私が「自然とは何か」と問われれば、迷わず「不寛容なもの」という答を返すことになる。逆に「文明とは何か」と聞かれれば、「自然から乖離（かいり）したもの」と答えたい。そして、私は自らが「温室の産物」であることに神経質なほど自覚的である。実際、この文章を書いている私の書斎は「不自然」、すなわち「文明」の象徴である。すべての壁は出入り口をのぞき本棚で埋まっており、光や風を取り込む窓はない。電灯とエアコンが無ければ機能しないが、時間や季節や天候に左右されることのない心地よい空間である。とはいえ、それは私が自然を憎悪し文明を信頼しているためではない。むしろ逆で、不寛容な自然に敬意にちかい畏れを抱いており、薄氷を踏（カ）む思いで文明にたたずんでいるといったほうが妥当であろう。そんな私が美しい里山文化の賛美に唱和するならば、それは偽善でしかないだろう。

そもそも美的鑑賞に耐える自然とは、文明によって矯正された自然である。ドイツの列車から見える田園風景は、惚（ほ）れ惚（ぼ）れするほど美しい。しかし、それは自然とは無縁の人工物である。いわば、ロマンティック街道の都市のように整然と計画設計された自然なのである。対するに、新幹線から見える日本の沿線風景を見よ。派手な商業看板、無秩序な配電線、中途半端な宅地開発、……何という醜く無計画な国土だろう、富士山も台無しだと、知り合いのドイツ人はため息をついた。しかし、むしろその醜悪さにこそ「矯正された自然」ではなく「自然との共生」があるようにも思える。

あるいは自宅の近くを散歩しながら、古い戦前の映画で見た京都の景色とダブらせる。古都の乱開発を「ああ人栄え国亡ぶ 盲たる民世に躍る」と悲憤慷慨（こうがい）したい気分も、よくわかる。しかし、エコロジーと結託した景観保護主義にも私はご都合主義の臭気を感じる。京都の町並みも、過去に何度も大改造されている。その都度、人々は自らが生活しやすいように変えてきたはずである。そうした実用が、いつしか伝統に変わっていく。そんな例は、無数にあろう。今日では伝統も格式もある歌舞伎は、それが登場したときには珍妙な見世物だったはずである。祇園の町並みとて、最初は新奇な代物（キ）と映ったに違いない。

そう考えるならば、景観保護の保守的心性とエコロジーの反体制的心性の結合こそ、いかにも面妖（ク）ではあるまいか。あるいはこの「伝統」と「自然」の翼賛者たちは、変動する社会の不確実性から目をそむけたいだけなのかもしれない。彼らは既成の伝統にお手軽（ケ）な意味を再発見する。いたる所に大いなる自然の神秘を見出し、文明が忘れ去った本当の生き方がそこに潜んでいるように語りたがる。だ

が、こうした振舞いは自由な社会がもたらした選択可能性に付随する個人責任から逃げるための口実ではないといえようか。ちょうど、情報化社会の中で血液型性格判断や星占いの運勢を信じる人がますます増えるように。

結局、いま私たちにできること、そして必要なこととは、里山文化を再生したり振興したりして「手を入れる」ことではない。むしろ文書や映像などに忠実にそのありようを記録すること、つまり、ただひたすらに「見る」ことなのではあるまいか。こんな自然があったという「記録」は、人間の自然観が移ろうとも、いや移るであろうからこそ、貴重な「記憶」となり新たなイメージの母体となる。「記憶」は私たちの自然への「思い」を決して裏切るまい。私たちの「まなざし」の中にだけ、私たちにとっての自然は存在する。私たちはただただ「見」、そして「覚える」べきなのだ。それが無くなったとき、哀しむことができるように。日本の美しい里山の風景を美しくも悲しい記憶として抱きしめるために。

私たちはテレビやインターネットや携帯電話に囲まれたメディア社会の生活を自ら捨てることはできないだろう。その軽薄さを「古きよき里山」の基準から批判することは容易である。しかし、それは多くの大衆文化批判と同じく、リベラルそうに見えて傲慢である。その高貴な精神の背後には変化に対する怯儒と他者に対する不寛容が見えかくれしている。変化を受け入れ他者に向き合うためには、メディア社会の現実から目を背けるべきではないのである。

（佐藤卓己『メディア社会』より）

問一　「禁じえない」とあるが、「禁じえない」の用法として**適当でないもの**を、次の中から一つ選べ。 15

1　涙を禁じえない　　2　怒りを禁じえない　　3　偶像を禁じえない
4　失笑を禁じえない　　5　賞賛を禁じえない　　6　同情を禁じえない

問二　「言葉のあや」が示すことがらとして**適当でないもの**を、次の中から一つ選べ。 16

1　多義的な表現　　2　巧みな言いまわし　　3　微妙で複雑な表現
4　間接的な言いまわし　　5　不適切な言いまわし　　6　弁解の余地を含む表現

問三　「ある種の居心地の悪さを感じていた」[ウ]とあるが、筆者はなぜ「居心地の悪さ」を感じたと考えられるか。最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 17

1　都会の高層ビルの会議室と里山の豊かな自然との違いに、気づかされたから。
2　先住民の伝統文化が文化産業によって商品化されていることに、アイロニーを感じたから。
3　過疎化の進行によって豊かな里山文化が失われつつあることを、あらためて痛感したから。
4　世界に誇れる伝統としての里山文化が外国人に伝わっていないことを、残念に感じたから。
5　温室育ちとして生きるしかない現代人が「自然との共生」を論じることに、欺瞞を感じたから。
6　近代以前の人々の感性に対する無理解を先輩からたしなめられた時の記憶を、思い出したから。

問四　「私のメディア史研究はグーテンベルクを出発点にすべきではない」[エ]とあるが、その説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 18

1　著者の研究は、ラスコーの洞窟壁画やメソポタミアの楔形文字を出発点とするメディア文化史に焦点を当てているから。
2　著者の研究は、現代のメディアに焦点を当てており、ルネサンス時代の発明品であるグーテンベルクの活字印刷技術は古すぎるから。
3　グーテンベルクの活字印刷技術は、過去の西洋のメディア環境のなかで発展したものであり、二〇世紀の現代人のメディア環境とはまったくかけ離れているから。
4　グーテンベルクの活字印刷技術は、「吹きっさらし」の人間を前提としており、そこでは現代の情報化社会の基盤

である電信や電灯の影響が排除されているから。

5 著者の研究は、西洋のメディア観とはまったく別のコスモスに存在する日本のメディア文化を通して、人々の文明観や自然観を研究することに重点を置いているから。

6 グーテンベルクの活字印刷技術は、「古代への情熱」に基づいており、「未来への情熱」に駆られた現代人のメディア文化史を研究するための出発点として適切ではないから。

問五 「コスモス」(オ)の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 19

1 信念　2 時代　3 秩序　4 展開　5 強制　6 慣習

問六 「薄氷を踏む思い」(カ)の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 20

1 退屈な会議に苛立っている心持ち
2 危険な場面に臨んで緊張している心持ち
3 予想外の事態が生じて驚いている心持ち
4 残酷な仕打ちをうけて悲しんでいる心持ち
5 悲しい出来事に直面して動揺している心持ち
6 思いがけない幸運に出会って歓喜している心持ち

問七 「景観保護の保守的心性とエコロジーの反体制的心性の結合」(キ)の内容として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 21

1 保守的な道路族議員と環境保護の活動家が、里山文化の振興において協力すること。
2 整然と計画された景観を保護に値する自然と見て、無計画な国土開発を「矯正された自然」と結びつける見方。

3 古い映画にみられる京都の景観が乱開発されたことを諦める気持ちと、自然が破壊されることに抵抗する気持ちを結びつける見方。

4 無秩序に開発された日本の自然風景の醜悪さと京都の古い町並みの美しさを対立させて、後者に伝統的な生活スタイルを結びつけること。

5 エコロジーの観点から里山文化の景観を保護し、山村地域を経済的に活性化させ、過疎地域の人口増加を促すための取り組みを行うこと。

6 住みやすさのために幾度も改造されてできあがった古い町並みを伝統的なものと見て、それを文明化されていない自然に寄り添う生き方に結びつける見方。

問八 「面妖」(ク)の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 22

1 厳かで雄大な様　2 明るく華やかな様　3 妖しく魅力的な様
4 面白く意味深な様　5 奇妙で不思議な様　6 恐ろしくて不気味な様

問九 「お手軽な」(ケ)という表現に込められた意図として、最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 23

1 安易であるということ　2 適切であるということ　3 明瞭であるということ
4 魅力的であるということ　5 わかりやすいということ　6 手間がかからないということ

問十 「口実ではないといえようか」(コ)とあるが、このような表現法を何と呼ぶか。次の中から一つ選べ。 24

1 反語　2 仮定　3 倒置　4 換喩　5 擬人法　6 反実仮想

問十一 [A] には以下の五つの文が入る。正しい順序を示すものを、次の中から一つ選べ。[25]

a しかし、その文化産業の「従業員」たちは本当に幸せなのだろうか。

b 同様に「自然との共生」の象徴として里山文化の旗を掲げることは、そこに生活する人にとって本当に幸せなことなのだろうか。

c アボリジニであれ、ネイティヴ・アメリカンであれ、先住民の伝統文化は「自然との共生」のシンボルとして大いに「振興」されている。

d 国際会議でオーストラリアに行ったとき、シドニーの目抜き通りで目にしたアボリジニの踊り、その傍らで売られていた大量生産の民芸品も脳裏をかすめていた。

e ただし、私個人は「遠来の客をありのままの日本、その日常生活へ招き入れる工夫が大切」という前段に力点を置き、「里山文化の振興」にある種のアイロニーを読み込まずにはいられなかった。

1 e c d a b　2 a b e c d　3 b d a c e
4 c d a b e　5 e d c a b　6 d c a e b

問十二 [B] に入ることばとして最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。[26]

1 里山のない　2 狩猟採集の　3 電気のない　4 文化産業の　5 情報化社会の　6 印刷技術のない

問十三 [C] [D] [E] [F] に入る語句の正しい順序を示しているものを、次の中から一つ選べ。[27]

1 C つまり D いわんや E だが F むしろ
2 C むしろ D つまり E いわんや F だが
3 C だが D むしろ E つまり F いわんや
4 C いわんや D だが E むしろ F つまり
5 C つまり D むしろ E だが F いわんや
6 C だが D むしろ E いわんや F つまり

問十四　本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。[28]（[28]の欄に、二ヵ所マークすること）

1　自然の景観は、やみくもにメディア記録の対象とされるべきものではなく、日常生活の実感に即して鑑賞されるべきものである。

2　自然の景観は、人間が手を入れたり保全したりすべきものではなく、いずれ変質するという前提ゆえに記憶されるべきものである。

3　自然の景観は、文明や都市文化に慣れた立場から定義すべきものではなく、先住民や農村民との共生を通じて初めて成立するものである。

4　著者の文明観は、テレビやインターネットや携帯電話に囲まれたメディア社会の生活に基づくもので、「自然」を不寛容なものと捉えている。

5　著者の文明観は、どんな過疎の村にも立派な道路を造ろうという考えであり、それによって「里山文化」へと人々を誘い、その価値を世界に発信することができると考えている。

6　著者の文明観は、自分たちが温室の産物だということを自覚し、リュシアン・フェーブルの言うルネサンス時代の野人や放浪者、村人との遠い距離を踏破しようとするものである。

国語

解答

大問一		解答
問一	1	②
問二	2	⑥
問三	3	④
問四	4	①
問五	5	⑤
問六	6	③
	7	③
	8	④
	9	④
問七	10	⑥
問八	11	⑤
問九	12	⑥
問十	13	④
問十一	14	①⑤

大問二		解答
問一	15	③
問二	16	⑤
問三	17	⑤
問四	18	⑥
問五	19	③
問六	20	②
問七	21	⑥
問八	22	⑤
問九	23	①
問十	24	①
問十一	25	⑤
問十二	26	③
問十三	27	③
問十四	28	②④